

# 『今月の天候と農作業』

通巻第5666号  
8月号  
令和4年7月28日発行  
宮崎県  
宮崎地方気象台



## 【 予報のポイント 】

向こう1か月の気温は、暖かい空気に覆われやすいため、平年並か高いでしょう。

## 【 確 率(%)】

要素	予報対象地域	低い (少ない)	平年並	高い (多い)
気温	九州南部	20	40	40
降水量	九州南部	30	40	30
日照時間	九州南部	30	40	30

## 【 予想される向こう1か月の天候 】

向こう1か月の出現の可能性が最も大きい天候と、特徴のある気温、降水量等の確率は以下のとおりです。

天候は平年と同様に晴れの日が多いでしょう。平均気温は、平年並または高い確率ともに40%です。

### <1 週目の予報> 7月30日(土)～ 8月5日(金)

期間の前半は、湿った空気の影響で曇りや雨となりますが、後半は高気圧に覆われやすいため概ね晴れるでしょう。

### <2 週目の予報> 8月6日(土)～ 8月12日(金)

高気圧に覆われやすいため、平年に比べ晴れの日が多いでしょう。

### <3 週目から 4 週目の予報> 8月13日(土)～ 8月26日(金)

平年と同様に晴れの日が多いでしょう。

※明日から1週間の、日別の天気や気温などは、週間天気予報

(<https://www.jma.go.jp/bosai/forecast/>)を参照してください。

## 普通作物

### ◆普通期水稻

---

#### 1 水管理と追肥

出穂期直前までの水管理では、根を健全に保つための間断かん水が基本です。なお、台風の際は深水とし、吹き返して高温・乾燥風の恐れがある場合は、風が止むまで深水状態を保ちましょう。また、高温時には、用水の入れ替えや飽水管理が対策としては有効です。

追肥（穂肥）の適期は、ヒノヒカリでは、幼穂の長さが約1 cmの時期です。施肥量は葉色を見て判断します。

#### 2 病虫害防除

いもち病は出穂前と穂揃期頃、紋枯病は出穂前に防除します。

トビイロウンカ（秋ウンカ）は、基幹防除を基本に、発生が多い場合は臨機防除を行いましょう。また、カメムシ類は穂揃期とその7～10日後の2回防除を励行しまししょう。

### ◆大豆

---

#### 1 中耕・培土等

雑草対策や発根を促すため中耕・培土を2回実施します。1回目は本葉3葉期に第1節の位置まで、2回目は本葉5葉期に第3節の位置まで行いましょう。

#### 2 病虫害防除

ハスモンヨトウ防除は若齢幼虫時が効果的です。網目状の被害葉を見つけたら直ちに防除をしまししょう。

### ◆そば

---

播種時期は山間地域で8月上中旬、西北諸県地域は8月下旬、沿海地域は8月下旬～9月上旬です。播種量は10 a当たり条播が6 kg、散播は約10 kgが目安になります。

(福川 泰陽)

## 施設野菜

### ◆施設野菜全般

---

施設野菜は次作の植え付けに向けて、土壌消毒や施設の修繕、施設周りの環境整備などを行いまししょう。特に、防虫ネットの破損により、施設内に害虫が侵入して、ウイルス病が蔓延することがあるため、防虫ネットの修繕や張り替えを行いまししょう。

### ◆露地きゅうり

---

夏期のきゅうりの生育は早く、収穫や摘葉、防除を徹底し、草勢低下を起こさないようにしまししょう。

また、べと病や炭疽病などの病害が発生しやすいため、定期的な農薬散布や下葉や垂れ枝の除去などこまめな管理が必要です。

## ◆夏秋ピーマン

---

雨よけ栽培での夏秋ピーマンは、施設内の温度上昇による尻腐果の発生や草勢の低下が起りやすいため、寒冷紗による遮光や循環扇の利用、妻窓の開閉を行うなど、温度管理に注意しましょう。

また、徒長しやすい草姿になりやすいため、こまめに主枝更新を行いながら、流れ果の発生を抑制して、収量の確保に努めましょう。

## ◆いちご

---

苗鉢内の培土が乾燥しやすくなるため、午前中に十分なかん水を行います。高温による乾燥に注意し、水がかかりにくいところには追加かん水を行うなどこまめな管理が必要です。

また、緩効性肥料等を置肥する場合は、今月中旬までに施用します。極端な肥料切れは苗質に大きく影響するため、苗の生育状況に応じて、液肥の葉面散布等を実施しながら、今月中旬までに切り離しを行い、健苗の確保に努めましょう。

(吉山 健二)

## 葉茎根菜類・いも類

### ◆秋冬野菜の土づくり

---

秋冬野菜の植付けに向けて土づくりを行う時期です。播種や定植の約一ヶ月前までに完熟堆肥や石灰資材を施用して、土壌改良をしましょう。

### ◆加工にんじん

---

内陸地帯では8月上旬、沿海地帯では中旬～下旬が播種の適期となります。土壌が乾燥又は過湿の状態では発芽率が低下しやすいため、適度な水分状態で耕うん・播種します。

播種深度は1.5cmが適しています。また、発芽が揃うまでは地表面の乾き具合を見ながら適宜かん水を行います。

### ◆食用かんしょ

---

4月に植え付けたかんしょの収穫期です。生育日数が130日以上になると、いもの形や皮色が悪くなるため適期に収穫しましょう。

ヨトウムシ類が多発する時期になるため、若齢幼虫期に薬剤防除を行います。また、地際の茎や芋の腐敗、立ち枯れが起きている株は速やかに抜き取り、ほ場や周辺に残さないようにしましょう。育苗ほは気温の高い夏場の内に残渣分解を行いましょ。なお、種芋を採取するほ場は、特に、病害虫の発生状況の確認や異常株の抜き取り、薬剤防除を徹底しましょう。

### ◆さといも

---

マルチ栽培の石川さといもは収穫が遅れると「水晶芋」や「割れ芋」により品質が低下するため、8月中旬までには収穫しましょう。

中生種では8月の土壌水分量が収量・品質に大きく影響します。土壌が乾燥すると「芽つぶれ症」が発生するため、散水を行ってください。なお、疫病対策として、排水対策の徹底や大雨及び台風後には治療剤の散布を行いましょ。

(川崎 佳栄)

# 果樹

## 1 常緑果樹

---

### ◆ 温州みかん

極早生品種のMサイズを目標とした果実横径は、8月10日の時点で50から56mmが理想です。今年は裏年傾向のため、結果数が少ない場合には、仕上げ摘果の時期や程度を遅らせ、後期重点摘果としましょう。

### ◆ 完熟きんかん

初期肥大を促すため、かん水は定期的につぶりに行いましょう。また、す上がり対策として、遮光資材等を活用し33℃以上の極端な高温を回避しましょう。8月下旬からは、傷果と一節二果なり果を中心に荒摘果を開始しましょう。

### ◆ マンゴー

7月下旬以降の剪定は、新梢の充実が不足し、花芽形成が不安定になります。収穫終了後は速やかに剪定を行い、葉面散布や新梢の整理、発根促進剤の利用によって、新梢の充実促進を図りましょう。

既に剪定が終了した早期出荷園では、十分なかん水と葉面散布を行いましょう。

## 2 落葉果樹

---

### ◆ ぶどう

収穫終了後の早期落葉は、貯蔵養分の減少とともに、翌年の生育にも影響を及ぼします。病害虫の防除を徹底し、早期落葉を防止しましょう。

### ◆ クリ

今月から収穫が始まります。収穫は毎日行い、特に温度の低い朝の時間帯に収穫することで、病害果や腐敗果を減らしましょう。

## 3 台風対策

---

防風ネットの点検や、冠水対策として排水溝の整備を行いましょう。

かんきつ類のかいよう病対策である銅剤の散布は、効果が高い台風襲来前に実施しましょう。

(鈴木 美里)

# 花き

## ◆夏秋ギク

---

強日射により、成長点付近の葉焼け発生リスクが高まるため、遮光や換気、葉面散布、かん水等の対策を遅滞なく実施します。

9月出荷作型では、多肥や高温により奇形花が発生しやすくなるため、適正な施肥、遮光や換気等を積極的に行いましょう。

## ◆秋ギク

---

作型ごとに、育苗、冷蔵、定植などの作業を計画的に進めてください。

なお、穂冷蔵時の温度は2～4℃とし、冷蔵期間は開花遅延を防止するために3週間までとします。  
また、高温時の穂の安定確保のために、摘心・採穂時にベンジルアミノプリン液剤を適宜、茎葉散布しましょう。

### ◆ホオズキ

---

土壌伝染性病害対策として、出荷終了後に腐熟処理を実施します。なお、残さ分解を促すために、カーバムナトリウム塩液剤や微生物資材の利用が効果的です。

また、次作に実生苗由来の地下茎を利用する場合は、発芽揃いを良くするために、早めに播種を行いましょ

### ◆スイートピー

---

催芽処理・種子冷蔵の実施時期です。

充実した大きい種子を選び、流水中で吸水処理を行います。また、事前に冷蔵庫の庫内温度が適切であることを確認してください。

ほ場の準備として、定植の数日前から遮光やかん水を行い、ハウス内温度や地温をあらかじめ下げ

### ◆デルフィニウム

---

中山間地は定植時期です。高温による早期抽だい防止のために、ハウス内の換気や遮光を行いましょ

### ◆キイチゴ

---

弱枝や不良枝の整理時期です。樹勢維持のために充実したシュートを3～4本程度残しながら、数回に分けて作業を実施します。

また、乾燥ストレスを軽減して萌芽を促進するために、必要に応じて通路かん水を行いましょ

(山塚 裕美)

## 畜産

### ◆家畜防疫対策

---

国内外での家畜伝染病の発生が続いています。家畜伝染病から、農場を守るため、畜舎内外の消毒はもとより、人・車両・物資の消毒と野生動物の侵入防止対策を徹底しましょう。

### ◆家畜

---

本格的な夏を迎え、家畜や家禽の生産性が低下する時期に入ります。畜舎の風通しを良くするとともに、換気扇や細霧装置を動かし、暑熱対策を十分に行いましょ

また、夏期は全ての家畜で、必要な給水量が多くなります。水槽やウォーターカップをこまめに清掃し、いつでも、新鮮な水が飲めるようにしましょ

暑さにより飼料が腐敗しやすい時期になります。カビが発生しているものや、色や臭いが悪いもの、熱をもった飼料は、絶対に給与しないでください。

ハエに加え、サシバエやアブなどの吸血昆虫も増えてきます。ハエは、堆肥舎の堆肥や飼槽の食い残し等が発生源となるため、飼槽や牛舎内をこまめに清掃しましょ

生源になるため、牛舎周辺の草刈りを実施しましょう。それでも害虫が発生した場合には、駆除用の殺虫剤を活用した対策を実施してください。

## ◆飼料作物

---

飼料用トウモロコシの収穫作業の時期になります。暑い中での収穫・調製作業になりますので、体調管理をしっかり行い、適宜、休憩を取りながら農作業安全を心がけて、作業を実施するようにしてください。

(藤井 真理)

## 特用作物

## ◆茶

---

これからの作業は、来年一番茶の母枝となる秋芽の充実と葉層や芽数の確保を図るためにとても重要です。

### 1 最終摘採と干ばつ被害の防止

充実した秋芽を確保するための最終摘採時期は、中山間地域で7月中旬、その他の地域で8月上旬が目安です。遅れ芽や徒長枝は秋芽を切らないように注意して整枝しましょう。

また、高温・乾燥は、秋芽の生育を抑制します。晴天が続く場合は、7日おきに25～30mmの散水が効果的です。

### 2 病害虫の防除

チャノミドリヒメヨコバイやチャノキイロアザミウマ、ハマキムシ類、炭疽病、もち病、輪斑病等の病害虫が発生しやすくなります。秋芽萌芽期と二～三葉期頃の2回、殺虫剤と殺菌剤を混用して防除しましょう。網もち病の発生が多い茶園では、四～五葉期頃にもう1回追加防除を行いましょう。

なお、秋芽萌芽期に降雨が多く殺菌剤の散布ができなかった場合は、秋芽三葉期頃に予防剤と治療剤を混用して散布すると安定した防除効果が期待できます。

### 3 秋肥の施用と土づくり

秋肥は、中山間地域や寒害を受けやすい品種、幼木等では9月上旬までに、それ以外は9月中旬までに土壌診断結果を考慮し、地域の施肥基準に準じて施用しましょう。土壌が固く根量が少ない茶園では、9月上旬を目安に堆肥を1～2t施用し深耕します。

加えて、苦土石灰によるpH改善にも取り組みましょう。

また、干ばつ等で樹勢の低下が見られる茶園は、液肥の散布が効果的です。

(竹田 博文)

## ◆しいたけ

---

しいたけの菌糸は、高温に弱く、夏場の高温により、ほだ木内の温度が35℃以上になると菌が死滅する恐れがあります。また、高温によるほだ木の乾燥は、しいたけ発生量の減少や品質の低下につながります。このため、伏せ込み地では、笠木の補充や遮光ネットを設置し、直射日光による高温障害を防ぎましょう。特に西日が当たる場所では、笠木の張り出しを長くしましょう。また、下草が繁茂すると通風が悪くなるので、適宜に下草刈りを行いましょう。なお、下草刈りを行う際は、地形や

風当たりを考慮し、過乾燥にならないようにしましょう。

夏場に高温乾燥の状態が続く場合は、伏せ込み地での散水が可能であれば、1週間に1回程度、日没以降の時間帯に水分の供給を図ります。ほだ場についても散水施設を活用し同様に水分の供給を図りましょう。なお、気温が上昇する時間帯に散水すると高温湿潤害菌の被害を受ける可能性があるため注意しましょう。

夏場は、害菌が発生しやすい時期ですので、こまめに巡回し、被害が見受けられた場合は被害木を取り除き、害菌の発生を防ぎましょう。

(堀川 和也)

## ◆たばこ

---

今月は、残幹処理や夏期深耕、並びに、9月末から開始される葉たばこの販売に向けての出荷規格確認等が、主な作業になります。

- 1 病害の耕種的防除のため、総かぎを終了したほ地から残幹処理を行いましょう。その際には、速やかに残幹根ごと、ほ地外へ持ち出しましょう。また廃マルチについては、市町村が定める期日・場所にて適正に処理しましょう。
- 2 夏期深耕は、土壌中の病原菌（立枯病等）密度低下や、土作りのための重要な作業となります。スキ等による反転深耕を行い、10日置きにロータリー等による砕土を行うように努めましょう。特に、今年立枯病等が発生したほ地については、念入りに実施しましょう。
- 3 貯蔵害虫発生防止のため、セリコは販売終了まで設置し、飛来予察に努めましょう。葉たばこに成虫や食害痕、排せつ物があった場合は、速やかに耕作組合へ連絡し、適切な処置を行ってください。また、貯蔵中の吸湿防止のため、全包ポリ袋梱包を行いましょう。
- 4 販売に向けて、出荷包の確認を行いましょう。異物、異臭、水分の確認と、土砂付着や腐れ等の手入れ不足がないかを確認しましょう。あわせて、販売見込票を作成してください。また、普通系にグレー葉、よごれ葉等の色損系が混入していないか確認し、混入している場合は、ピッキングを行いましょう。

(宮崎県たばこ耕作組合)

## 内容の詳細について

---

8月の天候と農作業の詳細内容について。執筆は県総合農業試験場及び森林経営課、宮崎県たばこ耕作組合が担当しています。各作物の病虫害の防除対策、気象災害の事前事後対策等の詳細は最寄りの支庁・農林振興局（農業改良普及センター）へ

☆「今月の天候と農作業」はホームページにも掲載しています。

(<http://nougyoukishou.pref.miyazaki.lg.jp>)

## 向こう1カ月間における農作物の主な病害虫の発生量と防除対策

作物名	病害虫名	発生量	発生状況と防除対策
普通期水稻	いもち病(葉)	やや多	<p>葉いもちの発生が多くなっています。箱施薬剤を施用したほ場であっても、薬剤の効果が切れると発病することがあるので注意します。また、穂いもちについては、出穂前に粒剤を施用するか、穂ばらみ後期及び穂揃期に粉剤または液剤による防除を徹底します。</p> <p>トビイロウンカは、4月下旬に初飛来を確認後、6月下旬に主要飛来を確認しており、その後も断続的な飛来が見られます。本虫は増殖率が高く坪枯れ等の被害が発生するため、ほ場での発生に注意します。セジロウンカは7月上旬にまとまった飛来が確認されています。ウンカ類の第2世代の防除適期は8月上中旬頃と予想されます。</p>
	紋枯病	並	
	トビイロウンカ (秋ウンカ)	並	
	セジロウンカ (夏ウンカ) コブノメイガ	やや少 並	
野菜類等	アブラムシ類	並	<p>アブラムシ類は、ウイルス病を媒介し、大きな被害を及ぼすことがありますので、育苗期からの防除を徹底します。</p> <p>ハスモンヨトウのふ化直後の若齢幼虫は葉裏を集団で加害しますので、この時期の発見に努め若齢幼虫期に防除を行います。</p> <p>オオタバコガの発生が多くなっています。ほ場を定期的に見回り、早期発見および若齢期の防除に努めます。</p>
	ハスモンヨトウ	やや少	
	オオタバコガ	やや多	
さといも	疫病	—	7月上旬に県内で初発生を確認しています。例年、7月下旬以降に発病が急激に拡大するので、薬剤による継続した防除を徹底します。
かんしょ	基腐病	—	発病株(つるや塊根)は速やかに抜き取り、ほ場や周辺に残さないようにします。また、発病株を除去したあとは、感染拡大を防止するために登録薬剤による防除を実施します。
カンキツ類	かいよう病	並	<p>台風による茎葉の損傷は、かいよう病の発生を助長しますので、襲来前に予防散布します。</p> <p>黒点病は感染源である樹冠内枯れ枝の除去に努めるとともに、薬剤散布後の積算降水量が250mmになると次の防除が必要です。</p> <p>ミカンハダニは、発生初期段階(寄生葉率30%、1葉当たり雌成虫数0.5~1頭)での防除がポイントです。</p>
	黒点病	やや少	
	ミカンハダニ チャキイアザミウマ	やや少 並	
茶	炭疽病 もち病 輪斑病	並 やや少 やや少	<p>炭疽病は秋芽の生育期に気温が高く、雨が多いと感染・まん延しやすいので、開葉期に防除を行います。</p> <p>チャノホソガの発生が多くなっています。ハマキ類の防除適期は、発蛾最盛期から7~10日後の幼虫孵化期になるので、多発園では幼虫の発生状況を確認して防除します。</p> <p>カンザワハダニは低密度での防除に努めるとともに系統の異なる薬剤をローテーションで使用します。</p> <p>クワシロカイガラムシは、防除適期を逃すと、防除効果が著しく低下します。ほ場を見回り、幼虫のふ化状況を確認して、適期に防除を行います。薬剤散布は、株内に十分薬液がかかるように実施します。</p>
	チャノカクモンハマキ	やや多	
	チャノソガ	やや多	
	カンザワハダニ	やや多	
	チャキイアザミウマ	並	
	チャノミドリヒメコバエ	並	
	クワシロカイガラムシ	やや多	

1) 「発生量」は、過去10年間の発生量と比較して、今後の発生量がどの程度になるか予測したものです。

2) 病害虫防除肥料検査センターのHPアドレスは、<http://www.jpnp.ne.jp/miyazaki>です。

